

「富坂プレディガーゼミナール」準備会

プレディガーゼミナール準備会をふりかえって

三村 修

今日の教会が直面する危機

日本は少子高齢化によって人口が減少する時代を迎えている。何も対策を施さなければ、礼拝出席者数が減少し、教会の建物の維持管理や牧師の生活を支えることは困難となる。

悩みを抱え、その解決を宗教に求める人たちはいるだろう。しかし、多様な価値観が存在するこの世界の中で、あえて教会に助けを求めてくる人たちが、これから急増するとは思えない。

洗礼を受けてクリスチャンになっても、教会を離れていく人たちもいる。

絶えず刷新され続けることを大切にしてきたのがプロテスタント教会だ。今、どのような刷新が求められているのだろうか。

これまでの教会会議

教会は話し合うことを大切にしてきた。そして、教会運営に関しては、民主的な運営を当然のものとし、しばしば、ロバート議事規則が参照されてきた(Mindell, 2002)。

その教会会議においては、正しさが議論の焦点となり、最終的には、多数決で物事が決められる。

しかし、その「制度的」教会のあり方そのものが、「小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」(マタイ 18:10) というイエスの教えとは正反対だ。

教会の制度的ありようが、教会を日本の隅々で維持することに貢献してきたが、その制度的ありようそのものが、生き生きとした交わりを実現することを困難にしている、という矛盾を抱えている。

コミュニティのリーダーに求められること

これまでの制度的教会のありようそのものが、矛盾を抱えているとはいえ、制度的教会はしばらく存続するだろうし、牧師という役割も、しばらく存続するだろう。

そして、今日の教会が直面している危機を乗り越えるために必要なのは、キリストを中心とする生き生きとしたコミュニティを再生し、持続可能にしてゆくことだろう。それは、詩篇と讃歌と霊的な歌（エフェソ5:19）による交わりであり、メンバー全員の声を聴き合うことのできる場だ。

牧師研修が提供すること

今回の牧師研修で取り組んだことの一つは、参加者一人ひとりが自分の内なる多様な声を聴くことと、研修会参加者からなる小さなコミュニティの中に響いているお互いの声を聴くことだ。自分の内にありながら、自分が無視している声に気付くには、それなりの研修、つまり、意図的な努力や同僚の協力が必要だ。

富坂キリスト教センターは、「霊性と社会倫理」をキーワードとして歩んできたが、自分の中の多様な声に気付く霊性を涵養することが、社会の中で無視されている声に心を開く社会倫理の感覚を磨くことになるだろう。

同僚性を育みながら、自分の内なる多様な声、コミュニティの中の多様な声を聴く場、そのようなコミュニティに奉仕する訓練の時間として、この研修会が成長してゆくことを私は願っている。

参考文献

Arnold Mindell (2002). The deep democracy of open forums: Practical Steps to Conflict Prevention and Resolution for the Family, Workplace, and World. (アーノルド・ミンデル (2013). ディープ・デモクラシー <葛藤解決> への実践的ステップ. 富士見ユキオ (訳). 春秋社)

プレディガーゼミナールと私 —振り返りと展望—

星野 香

牧師が教会の現場において求められるものは多岐にわたる。祈りや聖書を読む時間や説教のために割く時間よりも、教会運営や会議、付帯施設の業務などに費やす時間の方が実際は長い。教会の人々が求める牧師は、彼らの様々な要望にこ

たえ、教会員個々の思い描く牧師像と合致するように振る舞うことが求められる。しかし、牧師という立場にある人たちの中には、そうした現実求められる牧師の在り方と、牧師としての召命感との間にずれが生じて悩むこともあるのではないか。相談できる同労の友がいればよいが、そういう機会を得るのは実は難しく、孤独であったりするのが牧師だともいえる。心身の疲弊と霊的欠乏をいやし、召命と目指すべき本質の再確認のために、牧会者がサバティカルな期間を取得することは重要であろう。牧師が健全であることは、教会の健全さにつながると考えるからである。

今回のプレディガーゼミナールへの参加によって、私自身が勇気づけられ、力を得て、教会に戻ることができたのは間違いない。牧会現場と日常生活の場を離れた別の場所で、神の下、同じ働きに仕える人々と新しく出会い、短期間ではあるが共同生活を送ったことは互いに影響を与え合う結果になったと思う。このゼミナールの開催を知り、実際に参加できる状況が与えられるというのは簡単なことではないが、自身の飢え渴きに気づき、霊的な導きと必要な学びを得るために積極的な姿勢を持つことは大切だと思う。

牧師という立場ゆえに休暇を取ることが難しいのも理解できる。しかし、そうした困難さを克服してでも「プレディガーゼミナールに参加したい」と思える研修内容を整えていくこと、広く周知されるようアピールすることが、今後ますます必要になっていくに違いない。

聖書と黙想・祈りと讃美・傾聴と共感コミュニケーション・共同作業としての労働などが先のゼミナールでは行われたが、時間的制約もあり、合唱の練習の時間を取ることが出来なかった。ゆったりとした時間配分と同時に、4つの柱（祈り、黙想、礼拝、社会倫理）と霊性を、共同生活の中にどのように折り込むのが課題になる。食事も含め、生活全体が礼拝となっていくよう、祈りと御言葉を中心として霊的な養いも望まれる。

「霊性はただの考えに終わるものではなく、そこにおいて、キリスト者の生活が始まり営まれるような道に関するもの」であるから、神のリアリティーを十分理解するために必要なものである。¹人間は霊性による働きを受けて、信仰とその信仰に基づく現実生活を形づくり行動していくのであるから、私たちは「霊性を養う」ことによって、さらに神との体験を深める実践が必要になる。黙想、神との対話、御言葉の黙想からの分かち合いの共有、五感を用いる（体を動かすことも含む）こと、ひとりであること等が上げられるのではないか。

しかしながら、各人が「靈性」と捉えるものの解釈は多様であり、信仰者の誰ひとりとして同じ靈性を持つとは言えない。² それゆえにキリスト教の教理の違いを超えて表われてくる共通する本質を見ていかなければならないだろう。キリスト教の信条やキリスト教の持つ倫理観は、そうした本質に関するものであり、これらはまた、私たちの生きる上での信念や信仰、命の価値を規定する。

キリスト教倫理といっても、現代のように科学技術が発達し、以前はできなかったことが当たり前になる時代が変わったことで、問題定義はさらに拡大している。富坂キリスト教センターが大切にしている「社会倫理」は、どのような定義を持ち、またどのような範囲にまで及ぶものなのだろうか。この世界の支配者のように振る舞ってきた人間だが、生命やジェンダー、地球環境・宇宙にいたるまで、今こそ人の倫理観が問われているような気がしてならない。

まずは、「私たちが生活を共にすべき方は神ご自身である。」³ という事実を忘れてはならないし、神との交わりを熱心に求め、その交わりを維持するよう努めるのが牧師なのではないだろうか。⁴

神の癒やしと御恵みが感じられるプレディガーゼミナールとなるように期待したい。

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、・・・牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』（マタ 25：35-40）

参考文献および注

- 1 A.E. マクグラス著、稲垣久和 岩田三枝子 豊川慎訳、『キリスト教の靈性』 教文館、2006年、p18
- 2 同上書、p 26-40
- 3 E.H. ビーターソン著、越川弘英訳、『牧会者の神学 祈り・聖書理解・靈的導き』 日本キリスト教団出版局、2016年、p 237
- 4 同上書、p 238

プレディガーゼミナールをふりかえって

朴 貞蓮

1. 2024年2月パイロットプログラムの振り返りと展望について

「PSで私は何を受け取ったか」あるいは「現場の課題とPSの可能性」・・・

プログラムの中で、特に「エンパシーポーカー」を使って繰り返し演習をしたことで、自分自身が傾聴について理解が不十分であることに気づかされました。

今までの現場で‘これでよいだろうか’とよく分からず、もやもやしていたことの原因に気づかされた。私にとって主な原因の一つは役に立つと思われたい。気持ちを分かってくれる人だと認められたい願望が先走っていたと思います。

もう一つは、自分の道徳的規準、モラルからはみ出る内容だと傾聴に集中できず、判断し、正しいという気持ちが出てしまったり、関わり続けることに不安を抱いてしまったりしていたことだったと思いました。

「すべてのニーズは美しい」という言葉は衝撃的でした。実演の中で他者の感情やニーズを想像して寄り添うことを‘当て’に行くことと思って、良い答えを見つけ出そうとしていたので、最初は中々その意味を理解出来なかったし、うなずくことも難しかったです。そして、「あなたは〇〇の気持ちですか」と言ったことに「うん」と言われなことが自分の共感能力の無さを露わにしているのではないかと焦ったりしていた。

寄り添うこと、相手の気持ちやニーズに関心を持つ事自体が傾聴であることを繰り返し「エンパシーポーカー」の演習をすることで気づかされたことは、‘役に立たなければ’と勝手に重荷を背負っていた私の肩の荷を下ろしてくれました。

プログラムの内容を多彩にせず、関連性のあるものを繰り返し深めたり、広めたりすることで実感を伴う研修になると思いました。

ただ、今年の9月、ある方からの電話を連日受けた時、自分の学び、気付きはどこかへ吹っ飛んでいまして、まったく以前の自分に戻っていたことに、数日経ってから気づいたことがありました。継続するために、自らその学びの機会、応用に心かけることの大切さも思われました。

それでも、このことを気づかせてくれたのはPSのお陰だと感謝しています。

一つ、この研修会の特色として引き続き大切に行けたらと思ったのは御言葉を楽しむ、祈り、賛美する時間です。最初から言われていたことではありません

たが、経験してから改めて強く思うようになりました。研修会の後、植松さんの後継者を育てて欲しいと思うほど適切な賛美の選び、祈り、詩編朗読者の指名は研修のペースになっていたと思います。どんなプログラムになっても、テゼの祈りと賛美は是非、入れて欲しいと思います。

研修の内容と違いますが、違う神学校の出身の同労者や教団の違う同労者に出会えたことも楽しかったです。個人的な話しをするほどの時間はなかったけれど、多くを共有し、親密さを感じられる研修会でした。

2. 第1回PS研修（2026年2月）に向けて

何かの課題にぶつかり自分のあり方を振り返る時、「初心に帰る」ことをする時があります。主から私たちの志が与えられ、感謝と愛に溢れていた頃の自分が的を外れたことも含んでいたと思います。同時に先への不安も含んでいたと思います。

必ずしも、良い記憶ばかりでないかも知れないが、神の導きと祈りの友の支えに委ねながら進んでいた自分を感じる機会になれるのではないかと思います。

例) 就任式や准允式、接手札などの写真をデーターで出してもらい（ビフォー・アフター?）、一本の映像にしてプロジェクターを使用して視ながらお話をします。引退の自分(将来の自分)のためのメッセージなども面白そうだと思います。

富坂プレディガーゼミナール・ パイロットプログラムの振り返りと展望 ～共同体の「霊性と社会倫理」について～

岡田 仁

はじめに

2024年2月のプログラムに参加して、自らの原点であるテゼ共同体とボンヘッファー神学に立ち返る必要性を強く感じた。いうまでもなく個人の霊性は重要である。しかし同時に、共同体の霊性と社会倫理がいかにつながるかを確認するこ

とは、富坂ブレディガーゼミナールの今後の方向性を検討する一つの視座として不可欠であると考えからである。

筆者は2002年9月に故大庭昭博先生の呼びかけで、フランスのテゼ共同体の祈りの集いに初めて参加した。第二次世界大戦による様々な分裂と向き合ったブラザー・ロジェは、1940年にキリスト者の和解、そしてその和解を通して人類家族すべての和解に献身するためのコミュニティーを創設した。彼も初めは一人であった。彼が最初に受け入れたのは、ユダヤ人を中心とした難民であった。ロジェとブラザーたちは、終わりなき巡礼のごとく世界中からテゼを訪問する数万の老若男女を迎え入れてきた。テゼ共同体到着時に配布された文章に次の言葉がある。

「誰もが、自分の人生の意味を発見し、また再発見するために、新しい活力を取り戻すために、自分自身の生活の場に戻って責任を引き受ける準備をするために、ここにいるのです」。このことは、ロジェの「観想のうちに祈ること、これは愛のためです。虐待されている人々の人間性のために葛藤すること、それも愛のためです」という言葉が反映されており、ボンヘッファーの言葉、今日キリスト者であることは、「祈ることと、人間の間で正義を行うことだ」とも響き合うのではないか。この同時代にボンヘッファーはこの祈りに支えられてナチズムと闘っていた。テゼは「霊性」に強調点が置かれているように思われる。霊性とその体験は重要である。この霊性を社会倫理の視座からみるとどのような意義があるのだろうか。

後期ボンヘッファーの獄中書簡には「感謝」「信頼」といった言葉がしばしば記載されている。彼の霊性の基礎は、神の導きに対する信頼であり、彼が目指す霊性は責任を担うことであった。H・M・バルトによると、霊性は、エキュメニカルなプロセスにとって重要なテーマであり、エキュメニカル運動自体が、一つの霊的な出来事としてその担い手たちによって理解された。霊性は、信仰の教会的・共同体的性格と要素を強調し、新しい人間の霊的成長、霊における「生」に方向づけられ、そこで生きている社会での経験が重要な役割を果たす。「霊性とは、イエス・キリストをとおして働きかける神の霊に応答して形成されるわたしたちの生の姿勢のこと」(笠原義久)。ボンヘッファーの霊性を考える時、「社会性」を切り口にみていく必要がある。神秘主義の霊性と分けて考える必要があるからだ。

『キリストに従う』(服従) 1937年 告白教会牧師研修所での講義内容

彼は、第三帝国の要請にはなく、主イエス・キリストの御言葉に従う共同体がキリストの教会であるといい、聖書の福音の御言葉からナチスの政策やイデオ

ロギーを批判した。つまり、ユダヤ人はユダヤ人のままでよいのであって、むしろその「ユダヤ人であること」を大切にすべきであると。一つのキリストのからだなる共同体から、ユダヤ人を排斥することはできないし、あってはならないのだ。ヒトラーの要請する形（Gleichschaltung = 強制的同質性を強いて一元化を求める）に対して、ボンヘッファーはキリストの形（Gleichgestaltung = キリストのからだ、生き方）を形成し、キリストに従う道を示す。

『共に生きる生活』 1938年9月執筆（39年出版）

ヒトラーに象徴される「自己義認」は相手を暴圧的に支配するが、キリストの恵みによる義認は他者に仕える。この奉仕が共同体の交わりにとって重要なのだと。牧師研修所の霊性は、祈ること、聖書黙想、告解の三つによって担われた。研修所の回覧書簡に、「外的奉仕のための内的集中」という語が出てくる。外なる奉仕 = 告白教会の教会闘争に仕える牧師養成のための内的訓練。

『現代キリスト教倫理』 1940年9～10月執筆

教会は、キリストに対する罪責として認識、告白し、その責任を自ら引き受ける人たちの共同体であり、教会の使命と本質は、世に対して神との和解を語り、世が反抗する神の愛の現実を世に示すことだ。教会は、「キリストを崇拝する者たちが集まって造った宗教団体ではなく、人間の間に形をとり給うたキリストである。…キリスト教倫理の出発点は、キリストのからだであり、教会の形の中のキリストの形であり、キリストの形のできることを目指す教会形成である」。

『獄中書簡集』 1943 - 45年

「私は、神は決して無時間的な運命ではないこと、誠実な祈りと責任ある行為とを期待し、そしてそれらに答えられるということ信じると告白するボンヘッファーの霊性の基盤は、神の導きへの信頼と感謝であった。この信頼は、「将来への意志としての楽観主義」とも重なる。彼の楽観主義は、「生命力であり、他の人々が失望しているところでも希望する力、いっさいが失敗したと見える時にも頭を高く上げている力、反動に耐える力、将来を決して敵に譲り渡さずそれを自分のものとして要求する力」だ。

この世においてキリストがいかにして現実的になるのか。この文脈において霊性と関わるのが「秘義保持の規律」である。キリスト教の秘義は、祈り、礼拝、

信仰告白などをさすが、彼にとって秘義とは「神に愛され、神を愛すること」「罪なきイエス・キリストが、罪ある人間の罪を負うこと」を意味した。このような神の秘義をこの世において大切に保持することが靈性にとって肝要だという。

「われわれがキリスト者であるということは、今日ではただ二つのことにおいてのみ成り立つだろう。すなわち、祈ることと、人々の間で正義を行なうことだ。キリスト教の事柄における思考・言語・組織はすべて、この祈ること・正義を行なうことから新しく生まれて来なければならない」（1944年5月）。

ボンヘッファーは死を前に、敗戦後のドイツ教会の再建と新しい言語を考えた。そして、この世で神の苦しみを共に担う者こそがキリスト者であるという。「キリスト者は、苦しみの中にいる神のかたわらに立つ。…人間は、この無神的な世界に関わる神の苦しみを共に苦しむように、呼び出されている。…キリスト者であるとは、人間であることだ。…宗教的行為ではなくて、この世の生活の中で神の苦しみに与ることが、キリスト者を創る。これが、『悔い改め』なのだ」（7月18日）。「教会は他者のために存在する時にのみ教会である。…教会は、人間の社会生活のこの世的な課題に、支配しつつではなく、助けつつ、そして仕えつつあずからなければならない」。

共同体の靈性

聖書の理解では、内的なものとの外的なもの、靈的なものと肉体的なもの、信仰と行為、垂直的なものと水平的なものは不可分に共存している。祈りと正義を行なうことも分けることはできない。祈りはその基盤につながっている限り、行為を修正する。行為は、祈りを内面への逃避、自己満足への避難からわたしたちを守る。正義を行なうこと、つまり神に愛され、和解されたこの世界を受け取るとは、信仰に属することだから。教会は、宗教的オアシスを造ろうとするのではなく、信じることを学ぶようにと招かなければならない。それは、この世で神の苦難に参与すること。今日どこでこの「神と共に苦しむ」のか？神は、この世の中で不義が支配しているところではどこでも苦しんでおられる（ボンヘッファー）。沖縄、水俣、広島、長崎、福島、在日へのヘイトクライム…。教会は、この世のため、他者のための共同体として「人々の間で正義を行なうこと」、また「秘義保持の規律」の中で祈ることによってこの世界に奉仕すること、この二つは教会共同体において一つである。靈性を担う「秘義保持の規律」は、神の苦難を覚えることにある。この世に共にあることと他者のための存在は、外に向かつては

奉仕としてあらわれ、内に向かっては仕えるための訓練であらわされる。「この世における神の苦難を真剣に考え、ゲッセマネのキリストと共に目を覚ましている。それこそ信仰であり、悔い改めであると僕は思う。そのようにして彼は人間となり、キリスト者になるのだ」(ボンヘッファー)。代理において苦しみ抑圧された人々のもとに立つことを、ボンヘッファーは、「祈りと正義を行なうこと」で表現する。

さいごに、民衆の靈性に呼応する教会共同体の靈性についてふれておきたい。

ボンヘッファーの靈性は、その後、民衆の神学・解放の神学に受け継がれた。H・M・バルトは、民衆の神学は解放の靈性に分類されるという。民衆の神学における「恨」は、酷い目にあいながら物言えぬ何ものか、無念の思いをさす。神学者の徐南同は、苦難の民衆が恨の司祭になるといった。恨の司祭は、声の媒体である。ボンヘッファーの「代理」思想とも重なる。徐南同は、神学校を卒業する弟子たちに、恨の司祭になることを勧めた。韓国社会の矛盾、制度的構造悪から目を背け、貧しいもの・抑圧された者の鬱憤と抵抗精神を麻痺させる観念的神学を捨てて、民衆の傷を癒し、民衆の渴望に応え、恨を晴らす「恨の司祭」になれと。神学する真の姿勢は、「こだますること」であると彼は言い続けた。ボンヘッファーの靈性と民衆の靈性は、今日の教会共同体の靈性を考えるうえで避けることのできない問題ではないか。

日本基督教団は、合同しつつある途上の教会共同体である。沖縄をはじめ国内植民地の状況に置かれている民衆やその厳しい現状を、目を覚まして直視する、そして苦難を受け止め担う靈性が問われている。ゲッセマネのイエスと共に目を覚ますこと、他者の苦難を真に受け止める感受性、民衆の苦難にこだまする(呼応する)ことが求められているであろう。どこまでもわたしたちは、キリストの形・他のために仕える生き方に従う共同体形成を目指すのであって、Gleichschaltung(裁かれるべき人間が、ヒトラーのように一元化のために異質な存在として他者を裁き排斥すること)から自由になされている。下からの視座で、解放を求める(神の国の実現を求める)民衆の靈性に呼応し、連帯する責任が、祈りと正義を行なうことであり、苦しむ人々のもとに立つ共同体の靈性なのであろう。

「その日は来るだろう。そしてその日には、人々は再び神の言葉を、世界がそれに打たれて変わり・新しくなるような仕方でも語るように、召されるだろう。それは新しい言語となるだろう。おそらく全く非宗教的な、しかしイエスの言語のように解放的で、人を救う言葉。そうして人々はそのことで驚愕し、しかもその力によって圧倒されるだろう。新しい正義と真理の言葉。神と人との平和を、神の

国の接近を告げ知らせる言語・・・」(ボンヘッファー)。

ボンヘッファーは最期まで、将来への意志としての楽観主義に支えられたその信仰を生き抜いた。義とされた者の祈りと行為によって新しく生まれる教会に、説教の言葉のもとに「この世を変え、新しくする」日が到来することを確信していたのである。神の恵みに応答し、キリストに従う共同体は、他のための存在として仕え、民衆の靈性に呼応する。そのときに教会は、世に対して新しい、力ある言葉を語りつづける。

共感・共苦の神がいてくださるから、人間どうしの共感・共苦も可能なだろう。この神とつながるために、沈黙・黙想、安息(休息)を大切にしたい。経営や運営はデジタルでよい。しかし教会はアナログである。近い将来において本格的にスタートするエキュメニカルな富坂プレディガーゼミナールとその研修参加者たちが、力ある新しい言葉を生み出し、日本における教会形成に資することを願ってやまない。

参考文献

- ・ディートリッヒ・ボンヘッファー『キリストに従う』1970年、新教出版社
- ・ディートリッヒ・ボンヘッファー『共に生きる生活』2014年、新教出版社
- ・ディートリッヒ・ボンヘッファー『現代キリスト教倫理』1985年、新教出版社
- ・ディートリッヒ・ボンヘッファー『獄中書簡集』1988年、新教出版社
- ・『第86回信濃町教会修養会報告「共同体の靈性」を祈り求めて』2016年、信濃町教会
- ・大庭昭博『「社会倫理」再論(2) テゼからの黙想』(『キリスト教と文化 紀要』(18)、2002年。所収論文)
- ・マザー・テレサ/ブラザー・ロジェ『祈り—信頼への源へ』1994年、中央出版社
- ・拙論「民衆の靈性—水俣病事件と『恨の司祭』」(『基督教論集』第48号、2005年。所収論文)
- ・拙論「ディートリッヒ・ボンヘッファーにおける共同体の靈性」(『基督教論集』第60号、2017年。所収論文)

プレディガーゼミナールをふりかえって

宇佐美 節子

自分の現場を離れて、6人の委員がそれぞれにタラントを活かして各地から集

まった年令も教派も異なる参加者と一緒になって三日間の共同体体験は、中身の濃い経験であった。そこで聖書をどう読むか、賛美とどう向き合うか、一日三回の食事を日常的にどう位置づけているかをゆっくりと考える時となり、私にとっておいしい食事を皆と分かち合う豊かな時ともなったので感謝であった。

教会形成をしてきた二つの教会（神辺・石川）、最初の任地であった病院でのチャプレンとしての働きは、ある意味どの立位置で聖書を読むかと問われる三年間であった。無任所教師とならないように松山栄光教会担任教師にも就任して教会員に支えられ、主任教師との関係に行きづまりを覚え、神学校を卒業した連れ合いと神辺教会に着任。病院と教会を辞任することに。

共同牧会もそれなりに良い面と困難があったが、二人して教区や分区で用いられ、会堂・牧師館建築も全国の教会から献金が寄せられ神の業に参与する幸いを与えられた。

エキキュメニカルな方向、テゼの賛美、和解と一致に向けて、これからも共に学びと分かち合いを続けていくことに、教会の未来に希望と展望があるのではないかと思わされている。

現場で福音を生き、証しするための PS のありよう

2024年2月のパイロットプロジェクトを経て

植松 功

2月のパイロットプログラムは、たくさんのヒントをこれからの日本のPSの企画に与えてくれた。以下、わたしの気づきをメモとして記す。

沈黙・黙想・休息

- ・この個人的・共同体的「沈黙・黙想・休息」の体験はPSの根幹を成すもの。これ以外のプログラムはあくまでも2次的なものとして位置づける。
- ・何よりも参加者に必要なのは休息。身体の休息。心の休息。
- ・これらを提供し、さらに新たな学びのプログラムを企画するとしたら、少なく

とも3泊か4泊の日程での実施が必要ではないか。

- ・黙想の具体的な方法を学ぶプログラムを含める。たとえばマインドフルネス黙想。
- ・霊的同伴者（外部から／参加者同士）との個人面談の機会を提供する。
- ・優れたアートの鑑賞や創作の喜びの提供（映画・音楽・演劇・合唱など）もプログラムに含める可能性を検討する。
- ・どの会場であっても、聖なるスペースの確保が重要。

共に食卓を囲む

- ・そのために十分な時間をとろう。つまりこれ自体が大切なPS内容であるような時間として。
- ・一回は食卓にゲストを迎えたい。こども、障がい者、難民など。
- ・参加者みんなで食事を作ることに十分な意味があるが、それは限られた時間内では不要かもしれず、外注、あるいはボランティアによる食事作りが相応しい場合もあるだろう。

礼拝

- ・普段の現場でどのような礼拝・典礼を捧げてゆくのか、それはPSの学びの基本的な問いであろう。
- ・祝祭的・黙想的・エキュメニカルな礼拝・聖餐式の摸索。
- ・これらの礼拝を参加者とともに準備する時間をプログラムに含める。

詩編・み言葉・歌の分ち合い

- ・これは「沈黙・黙想・休息」と深く関連していて、この二つのプログラムはセットで可能だろう。
- ・挫折の物語の分ち合い。これを祝祭の物語へと変容させることがPSの使命ではないか。
- ・これらの物語、分ち合われた御言葉や歌を用いた礼拝を工夫しよう。

非暴力コミュニケーションの学び

- ・パイロットプロジェクトでは、これは新鮮な学びのときとなり、内容的にも時間的にも大きな位置を占めた。
- ・これから企画しようとするPSで、このような非暴力コミュニケーションに関する

る学びを、優先順位としてどこに位置づけるのか、また他の学びの可能性もあるのか、もう一度確認・検討しよう。

社会倫理と霊性

- ・小さくされている人（難民・難病患者・PTSD 当事者など）との交流・食事・祈りなどの可能性を探ろう。

労働

- ・パイロットプロジェクトでは、有意義な体験として評価されたが、あらためて黙想、身体性、連帯などのテーマに基づいて、その意味をスタッフを含めた参加者で学ぼう。